

# 宣教師が見た日本における南蛮服飾の受容について —16世紀後半から17世紀初頭を中心に—

水谷 由美子 山口県立大学

## I はじめに

南蛮服飾研究の嚆矢は、言うまでもなく丹野郁著の『南蛮服飾の研究—西欧衣服の日本衣服文化に与えた影響—\*1』である。「南蛮服飾」と言うのはかなり便宜的な言葉であり、この言葉が包含する服飾の実態からして広い概念を持つ。丹野の先掲書では同時代の西欧服飾と南蛮屏風に描かれた南蛮人の服飾、およびそれらの西欧化された衣服を装う日本人の服飾との関係が検証されると同時に、西欧化された日本服飾の遺品に関する緻密な研究がなされている。一般に南蛮人の服飾と言う場合の南蛮服飾は西欧服飾であり、その影響下で日本で作られた西欧風の服飾もまた南蛮服飾と言うことができる。そこで、本論では16世紀後半から17世紀初頭を扱うことから、上の両者を含めて南蛮服飾と考えているが、区別して記す必要がある場合には、イエズス会宣教師やポルトガル人が着用しているものは西欧服飾とし、日本人が着用し西欧化したものは洋風服飾と表現する。

しかし、日本にもたらされた西欧服飾自体も、実はすべて直接、ヨーロッパからもたらされたものばかりではない。ポルトガルの貿易商人やイエズス会宣教師が航海して来日してきた途中の、インドやシナ等のアジアの国々の素材が用いられた、あるいは縫製された事実は宣教師の記述からも明らかである。従って、西欧服飾の概念にアジア的な要素をも含めて理解する必要があることをあらかじめ確認しておきたい。

先掲書をはじめとする服飾史、文化史そして美術史等の膨大な先行研究によって、南蛮服飾は語られてきた。これらを踏まえつつ、

本論では改めて宣教師の遺した手紙を読み、彼らの目から見た南蛮服飾の日本における受容のあり方を検証しようとするものである。特に16世紀後半から17世紀初頭において、日本人が宣教師からの「贈り物」として南蛮服飾に出会い、日常着として受容し、さらに自らの手で作り始めたことを検証する。さらに、日本で南蛮服飾が流行するに至ったその背後に、聖フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier, 1506年～1552年) 以降、日本における宣教でもっとも重要な役割を果たした一人である、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539年～1606年) の意図があったことに注目する。

## II 研究目的

「南蛮」という言葉は、もともとは中華意識が強いかつての中国で周辺諸国の中の南方に位置する地域を指したものであり、日本でも中国文化の圧倒的な影響下に、『日本紀略』長徳3年(997年)10月1日の条で初めて使われているが、そこでも中国の南方の地域を指す\*2。室町時代(1392年～1573年)には「南蛮」は「南」の方向を指すだけの意味で多く使われている。1543年に南蛮人が来日して以降も、多くの日本人は、まだヨーロッパに対する正確な知識を持たなかったのであるから、恐らく彼らを南方から来た人くらいに認識していたに違いない。

現在の我々の知識と情報量から見ると、言うまでもなく日本とヨーロッパの地理的条件や文化的条件はかなり距離があり、異質なものと簡単に判断することができる。しかし、ヨーロッパ人が来日した当初、彼らは日本人

からインド人と間違われ、キリスト教も仏教の一派として認識されたほどであるから、異国文化としての南蛮文化の受容はそれほど抵抗感があったとは考えられない。むしろ、初期の南蛮服飾は、時の権力者たちへの宣教師からの贈り物としてもたらされた場合が多い。珍奇なものを喜び、楽しんで新しいものを着たいという権力者たちの遊び心が豪華な贈り物によって刺激されて、南蛮服飾の受容が助長されている。

また庶民的な階層では、日本各地のイエズス会の教会で催される各種の祝祭儀礼において、華やかな祭壇装飾や司祭たちの衣服、そして着飾った信者たちの行列を一目見ようと、多くの人々が詰めかけたことを、宣教師の通信はたびたび伝えている。多数のポルトガル貿易商人は、主に堺や長崎などの主要な港を活動の場としていたので、それ以外の地域の日本人の目に触れることはほとんどなかった。

それ故に、南蛮屏風などに描かれたものは別として、一般の多くの日本人の目に触れる機会が多かった西欧服飾は、むしろ宣教師をはじめとする教会に関係する人々の姿であり、また宣教師たちが日本各地で土地の殿様や関白などに贈った贈物としての服飾であった。

以下では、まず宣教師が通信した内容を整理し、そこから浮かび上がって来る日本人による西欧服飾の受容と、洋風服飾の創造への過程を検討することを主な目的とする。

### III 研究の方法

以上のことから、本論では南蛮服飾受容に見られる日本人の精神文化的側面について注目し、宣教師たちの通信を基礎資料として、宣教師が見た南蛮服飾の受容に関する記述を整理し、それらを解釈することから始めたいと考える。もちろん、南蛮服飾については遺品や南蛮屏風に描かれた像を参考にすると、

今回は補完的程度に留める。

本論で資料として扱う通信は、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 全4巻\*3』、ヴァリニャーノの『日本巡察記\*4』、『完訳フロイス日本史 全12巻\*5』、『16・7世紀イエズス会日本報告集 全15巻\*6』、そして『新異国叢書\*7』の中の『イエズス会士日本通信上・下\*8』と『デ・サンデ天正遣欧使節記\*9』である。しかし、ここではすべて翻訳書を使用する。なぜなら、それらが膨大な資料から抄訳あるいは編集されており、原書にすべて当たるとはかなり厳しい状況だからである。また、先行研究も以上の翻訳を使用している場合が多く、資料的な信頼性が高いと言えるためである。

以上のような膨大な通信が残されたのは、イエズス会の初代総長イグナティウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola, 1491年～1556年) が、会の組織を固め、統一を守り、指導を徹底するために通信制度を定めたことに起因している。それ故に、聖フランシスコ・ザビエル以来の宣教師たちは、ヨーロッパやインドの同会員に向けて多数の書簡を送った。ただし、保存された通信には公開のものと非公開のものがあり、上述した通信はすべて公開のもののために、加筆や訂正そして誇張などが挿入された可能性がある。アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、自らの巡察記において、こうした問題を指摘している。本論では通信の内容を慎重に読みとるとともに、上記通信の相関性をもなるべく考慮した上で、資料として読みとる。

### IV 南蛮服飾の受容—「贈り物」から日常着へ

日本宣教の嚆矢を担ったフランシスコ・ザビエルの事例は、贈り物が日本での布教活動に功を奏することの最初の証左となる。ザビエルは1551年に、大内義隆 (1507年～1551年) をインド総督の使節として訪問した。これは彼にとって2度目の訪問であった。1度目は

かなり貧相な服装だったが、今回は日本の習慣に従い、彼は司祭としての正装をして山口の殿様と会見した。ザビエルは、書簡第96でその時のことを次のように語っている。「神の聖（み）教えを述べ伝えるためには、ミヤコは平和でないことが分かりましたので、ふたたび山口に戻り、持って来たインド総督（ガルシア・デ・サ）と司教（ジョアン・デ・アルブケルケ）の親書と、親善のしるしとして持参した贈り物を、山口侯に捧げました。・・・<sup>10</sup>」ザビエル来山400周年を記念して山口市亀山公園の一角に建立された、旧山口サビエル記念聖堂のステンドグラスの一枚（図1）に、ザビエルが大内氏館で会見している様子が表されている。山口市とザビエルの縁で姉妹都市になっているスペインのナヴァラ州パンプローナ市にて製作されたものである。しかし、1991年に消失し現在は見られない。いずれにしろ、こうした図版から、我々は西欧文化を受容したもっとも初期の劇的出会いを想像するしかない。



図1 「2度目の大内義隆へのザビエル訪問の図」旧山口サビエル記念聖堂のステンドグラスのシリーズ作品の一つ、1952年建立 1991年焼失 Stained glass

この時の13種の贈り物とはつまり、望遠鏡、オルゴール、洋琴、金襴の布、ポルトガルの衣服、装飾時計、火縄銃、美装した聖書、精巧なガラス製花瓶、鏡、老眼鏡、陶器、絵画であった。大内氏は大いに喜んでザビエルに返礼として多くの品物を差し出し、金・銀などを与えようとしたが、ザビエルはキリスト教の布教許可と領内の人々の信仰の許可を望んだ。それらは許されて日本におけるカトリック布教の最初の正式な許可となった。

こうして大内義隆は南蛮服飾を正式にポルトガル王ジョアン三世（Joan III、1502年～1557年）から送られた最初の人となるのである。残念なことに、大内義隆が南蛮服飾をいかに装ったか、あるいは金襴をどのように用いたかを示す記述は現在まだ知られていない。宣教の許可あるいは優遇と引き替えに、多くの上層武士が宣教師から高価な南蛮の贈り物を受けたが、その最初の人が大内義隆であることは明らかである。

このように布教活動を円滑にするために、贈り物がいかに重要であるかについて、ルイス・フロイス（Luis Frois、1532年頃～1597年）が1577年に巡察師ヴァリニャーノに宛てた書簡の一部を以下に引用する。「日本では、一般に大身を訪ねるときには、土着の者も他国の者も、また僧侶も俗人も何か品物を携えて行くのが習しであり、聖なる記憶に残る我らのメストレ・フランシスコ（・ザビエル）師、・・・中略・・・以下、日本に駐在するすべての司祭と修道士らもこの習しに従っている。なぜなら、もし進物を携えて行かなければ礼儀を欠くことになるほか、大身らと親交を結ぶことができないからである<sup>11</sup>。」この通信は、これから来日するヴァリニャーノに贈り物の大切さとそのために何を用意したらよいかを助言するために書かれている。

彼が訪問するであろう異教徒の大身が期待しているものについて、次のようにフロイスは言っている。特にここでは服飾品に関する

ものだけを選んで記すことにする。「彼らが珍重する品物で、今よく思い浮かぶのは、ポルトガルの帽子でタフタかピロードの裏地があるもの、コルドバの皮革、ピロードか緋色の毛の財布、・・・(中略)・・・ポルトガル製布地の外套、シナ製だが上質の綿織物、・・・(中略)・・・フランドルの布地、毛氈などである\*12。」さらに、身分の高いキリシタンの貴人のためには、聖具や聖画像などを進めている。

1581年に都から発信したルイス・フロイスによる書簡には、その助言を受けてヴァリニャーノが1580年に織田信長(1534年～1582年)を本能寺に訪ねたとき、進物として鍍金の燭台、深紅のピロード1反並びに切籠ガラスを携えて行ったので、信長から非常に歓待されたことを記している\*13。

以上の記述から、贈り物の中でもピロードが非常に珍重された服飾の素材であったことがわかる。16世紀後半の遺品を見ると、ピロードで外套や陣羽織が製作されたことがわかる。現在、残された数少ない遺品の中で、名古屋市秀吉清正記念館所蔵の伝豊臣秀吉(1536年～1598年)着用の茶地天鷲絨(ピロード)洋套の図版を示しておく(図2)。地織りのピロードの他、ここに示されているように、豪華な刺繍模様が施され、さらに立体的な素材表現がされている。



図2 茶地天鷲絨洋套(伝豊臣秀吉着用)  
16世紀末 名古屋秀吉清正記念館所蔵  
Brown velvet manteau worn  
by Hideyoshi Toyotomi

次に、アマドール・ダ・コスタ修道士が1577年にシナからポルトガルのイエズス会司祭・修道士に送った書簡には、宣教の成功と同時にポルトガルの衣服が日本人に受け入れられている様子が報告されているので、以下に引用する。「ドン・バルトロメウ(大村純忠)の所領にはもはや一人の異教徒もなく、彼は甚だ有力で、今新たに自然の岩の上に一城を築いた。これにより、かつまた、彼の敵のうち最後の最大の者が死んだことにより、きわめて平安である。彼には子息が二人おり、彼らは甚だよきキリシタン武士で、ポルトガルの衣服のみを好んで決して和服を着ようとはしない。かの地(日本)では彼らの衣服を作ることができないので、当シナに注文している\*14。」

大村純忠(1533年～1587年)は、1562年にポルトガル船が肥前横瀬に来航した時、横瀬浦の半分を教会領にした。しかし、翌年に造反した家臣によって攻められ横瀬浦は全焼する。この年、彼はトルレスから洗礼を受け最初のキリシタン大名となり、ドン・バルトロメウという洗礼名を授かった。大村氏が洗礼を受けてから14年後に大村領は以上の記述にあるように、キリシタンの国になった。上述に見られるように、大村氏の息子が和服を着ないでポルトガルの服装だけを装うとあり、南蛮服飾が単にめずらしいものではなく、日常着化している事例として貴重な報告である。また、南蛮服飾がまだ日本では作られておらず、シナに注文していたという点にも注目する必要がある。

## V ヴァリニャーノと南蛮服飾の流行

ここでは、ヴァリニャーノがイエズス会の評価を高め、布教を強化しようとした結果、南蛮服飾の流行の引き金を引くことになったことを検証する。彼は、第1回目の来日(1579年～1582年)時に、迫害が迫っている中で、新たな布教戦略として、日本人に本物

の西欧文化・文明を教え、カトリックの威信を日本人自身の言葉で語らせることで、宣教師ひいてはイエズス会の評価を高めようと、天正遣欧使節を企画した。そして『天正遣欧使節記』にあるような体験を通して、8年後の1590年に4人の少年使節はヴァリニャーノに伴われて帰国した。この企画が成功したことは、後述のフロイスの報告からも理解できる。

翌1591年にヴァリニャーノ一行が時の関白秀吉（1537年～1598年）に聚楽第にて謁見した時のことである。紙面の関係で詳しくは説明できないが、まず、ヴァリニャーノは、4少年使節を中心に、インド人の馬丁、騎馬のポルトガル人、貸し与えられた南蛮服飾を着た小姓たち、イエズス会の司祭そして徒歩のポルトガル人を構成要素として、すべての人々に正装させ、宿泊していた邸宅から聚楽第までを行進する見事な行列を考案し、実行した。ここで4少年使節が彼らのワードロブの中でどれを選んで着ていたかは定かではないが、現存する彼らの南蛮服を着た上半身の図像を示しておく（図3）。これは京都大学付属図書館所蔵の「天正遣欧使節肖像」で、1586年にアウグスブルグで発行された木版画の新聞に掲載されたものである。彼らの服装はアンブロジアーナ図書館蔵の『ウルバーノ＝モンテ年代記』に描かれた図像とほぼ同じなので、彼らがヨーロッパで法王カススペイン王から贈られた赤い上衣・流行のジゴ袖、全体にスラッシュがあり、衿とカフスには高級なレース飾りがある豪華な服を着用した姿で、多くのメディアによって流布されたと思像できる。

フロイスは、その感想を次のように記している。「・・・この珍しい光景を見物するために街路や戸口に集まった人々は数限りなく、彼らは異口同音に、都が始まってこの方、このような光景は見たことがないと語っていた\*15。」さらに、フロイスが報告するには、「(巡察師の司祭らが) 都に滞在していた全期



図3 天正遣欧使節肖像 京都大学付属図書館所蔵  
Japanese mission to European countries

間を通じて、ポルトガル人たちを見物し、彼らと話をしようと、好奇心に駆られて来訪した貴人や殿たちの数は非常に多かった。とりわけ彼らは日本人貴公子たちと語ることを喜び、多くの者は貴公子たちを自宅に招待し、彼らの談話を聞いて感心した。人々は貴公子たちから、旅先での見聞や、彼らがどれほど名誉ある待遇を受けたかを報ぜられ、その着用している立派な服装を見るに及び、疑いもなく、彼らの事柄に対する評価が日本では一段と高められた。このたび（伊東マンショらの）使命は、期待されていた目的を達したのである\*16。」

ヴァリニャーノは、天正遣欧使節の帰国と同行して再来日する前に、日本における迫害の情報を得て、マカオに滞在していた。そこで彼は『天正遣欧使節記』を企画し、スペイン語で編集した。それをデ・サンデに、当時の西欧世界およびカトリックにおける共通語であったラテン語への翻訳を依頼し、1590年にマカオで発行した。イエズス会によって運営される教育機関で教育を受けた日本人キリシタンは、ラテン語を学習している。

松田毅一の「キリシタン学校」\*17で、ヴァリニャーノが授けた時間割が紹介されている。有馬のセミナリオの例からわかるように、教育のまず最初がラテン語で次に日本語と音楽であった。

ラテン語の教育が必ずしも成功したかどうか

かは疑問視されているが、少なくともセミナーオで学んだ上級生の中で、この書物の内容を理解することができたものはいたはずである。それ故に、実際に4人の遣欧使節一行の姿を見ない人々も、ラテン語に通じた日本人の修道士たちの口から、人々は西欧の文化・文明がいかに優れているかを聞くことができた。このようにして、『天正遣欧使節記』は日本人一般の西欧への憧れを増幅させるものとして機能したのである。

ヴァリニャーノ一行の訪問の後、輝くような豪華な服装の総司令官(カピタン・モール)、ガスパル・ピント・ダ・ロシヤが名護屋(現、佐賀県東松浦群鎮西町)の秀吉を訪れた。カピタン・モール一行の姿の見事さによって、政庁の人々の世俗的南蛮服飾へのエキゾチズムがなお一層駆り立てられた。そして、フロイスは1593年の通信で次のように報告している。「巡察師の使節(行が終わって)後には、私たちのことについての日本人の評価はたいしたもの、政庁においては、なんらかのポルトガルの衣類を身につけていない

者は人間とは見なされないほどでした。このように大流行することはまさしく不思議なばかりでした。多くの諸侯は、種々のカパの軍装、肩掛けマント、襷袢衣、半ズボン、縁なし帽などを持っていました。太閤様が名護屋から都に向かって出発する時には、名護屋は市(まち)と政庁を挙げて、ポルトガル風の衣裳をまとめて彼に随伴しました。そしてそういう服装で都入りをしたのでした。長崎の仕立屋たちは、一同の仕立てに従わねばならず、皆が都に行くので休む暇もない有様でした。また、彼ら(日本人)の間では、今、琥珀の球や金の鎖とかボタンを用いることが流行しています\*18。」以上のフロイスが記述する服装がどれであったかを特定することは出来ないが、たとえば襷袢衣は図4の紀州東照宮所蔵の襷袢を付けた鎧下(伝徳川頼宣)が参考となる。また、半ズボンは図5の同じく紀州東照宮所蔵のカルサン(伝徳川家康着用)そして、ポルトガル風の衣裳は図6の熊本・本妙寺所蔵のジバン(伝加藤清正着用)に見られるようなものであったのではないかとと思われる。

上記では日本人がすでに南蛮服飾の仕立てをしている例が示されているが、1596年にフロイスが長崎から狹下に送った年報の中では、高貴な日本女性が宗教服等を制作してい



図4 襷袢を付けた鎧下(伝徳川頼宣)  
紀州東照宮所蔵  
Under-armor with ruff

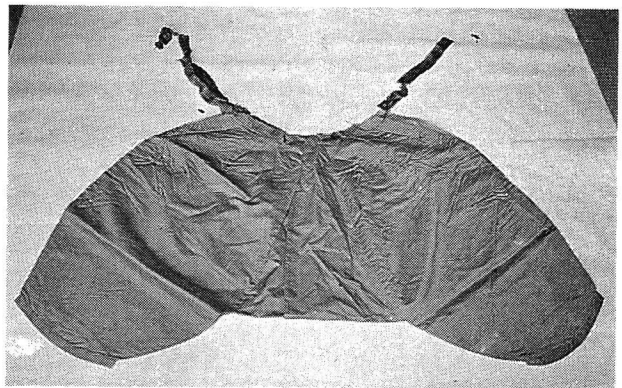


図5 半ズボン/カルサン(伝徳川家康着用)  
紀州東照宮所蔵  
Calcaes



図6 上衣/ジバン (伝加藤清正着用)  
16世紀末 熊本・本妙寺所蔵  
gibao



図7 カズラ 17世紀 リスボン  
ポルトガル国立古美術館  
casula



図8 「病める日本人を癒す聖フ  
ランシスコ・ザビエル」  
アンドレ・レイノーゾ作  
1619/22年 リスボン  
サン・ロケ教会博物館  
St. Francisco de Xavier

ると報告されている。壱岐地方の殿が朝鮮戦役に行った時のこと、その夫人アガタはデウスに献身的なキリシタンで、夫が家族のために朝鮮から送って来たダマスク織物を教会に献上して、上祭服(カズラ)や教会の装飾品を作った。さらに、必要な衣服を司祭や修道士のために作り、進呈している\*10。

アガタがダマスク織物で作ったカズラはどのようなものかは明らかではないが、ここでは17世紀と同定されたカズラ(図7)を参考にす。宣教師の普段の服装は簡素であることが決められているが、儀礼で司祭によって着用されるカズラはかなり豪華なものであったことがわかる。また、その他必要な衣服とあるが、一般に聖ザビエル以下、来日した宣教師は、どのような服装を身につけていたのかを検討する。

ここでアンドレ・レイノーゾ作「病める日本人を癒す聖フランシスコ・ザビエル」(1619/22年、サン・ロケ博物館所蔵)(図8)、「巡察師ヴァリニャーノ」(図9)、マヌエル・エンリケス作「日本の大名に説教する聖

フランシスコ・ザビエル」(1640年、コインブラ司教区所蔵)(図10)、そして「南蛮屏風」(部分・サントリー美術館所蔵)(図11)を参考にす。おおよそイエズス会の宣教師の服装の定型は、図8に描かれたザビエルの姿にあるように、裾までの長さの黒の修道服カソックを着用するのが一般的である。その下には白のアルバ(図12)が着用され、黒いカソックの衿元、袖口そして裾などから、それが見えるようにして着用されている。カソックの上には、図9のように黒のマントが着用された図像が、多く見受けられる。また、儀礼に際しては図10に描かれたザビエルのように、カソックの上に白いサープリスが着用され、同時に首からストラが掛けられる。ストラには豪華な布や刺繍などが施される場合が多い。

現存する多くの南蛮屏風に、幾度となくイエズス会の宣教師が描かれているが、図11にあるように黒い帽子を被った姿で描かれることが多い。以上のカソックの衿から覗くアルバの衿は、ヨーロッパで描かれた絵画では、



図9 「巡察師ヴァリニャーノ」  
Visitor Priest Valignano



図10 「日本の大名に説教する聖フランシスコ・ザビエル」  
マヌエル・エンリケス作 1640年 ポルトガル  
コインブラ司教区  
St. Francisco de Xavier giving a sermon

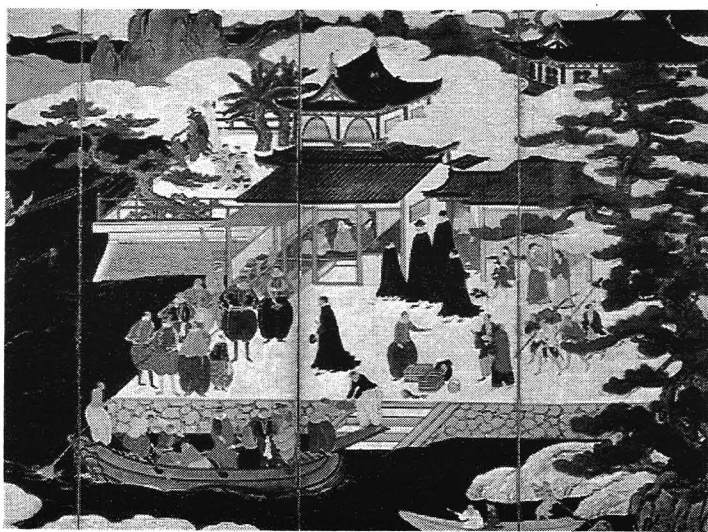


図11 「南蛮屏風(部分)」  
サントリー美術館所蔵  
Nanban folding screen



図12 長下衣/アルバ 17世紀  
リスボン  
ポルトガル国立衣装博物館  
White alba



ほとんどが単純なスタンドカラーで描かれている。しかし、図11にあるように南蛮屏風では当時モードとなっていた襷袢がカソックから見えるように描かれている例をたびたび目にする。南蛮船に乗ってやって来た商人一団の服装と宣教師の服装が、どれほど写実的に描かれたかは、それぞれの屏風や作者によって異なる。しかし、図11の例ではカソックの下からボンバージャとインドで呼ばれていただぶだぶのズボンの一部とそのシルエットが見えている。

宣教師の服装と商人の服装の混同がされて理解され描かれたか、あるいは宣教師も生活や布教上の理由から民間人のような服装を、カソックの下に着用していたと推測することができる。しかし、この点は今後の課題としたい。

イエズス会宣教師の基本的な服装は、以上のようなものであった。敬虔な信者であったアガタは、カズラの他に以上のような宣教師たちの服装を教会のために製作したに違いない。聖と俗の両世界で、西欧服飾は受容され、かつ洋風服飾が日本人の手によって作られるに至ったことが、以上に記したような宣教師の記述から理解される。

## VI まとめ

以上では、南蛮服飾の受容の実態を、「宣教師からの贈り物」の視点からとらえ、また「キリスト教伝道と伝播の過程」の中で、宗教との関係ばかりでなく風俗として南蛮服飾が流行していった事情を、特にヴァリニャーノの布教活動強化策つまり天正遣欧使節と帰国後の行列を中心に検討した。なお、アガタの例から宗教的な服飾観がキリシタンの装いにおける美意識へ影響していることを示し、聖と俗の精神文化の両面から南蛮服飾をとらえた。

つまり、本論では宣教師の通信を資料として、南蛮服飾の受容について、多くの人々に

受け入れられて行く過程とそれを助長する力そして、そうした流れに必ずしも同調しなかったキリシタンの感情の襷の一面を浮かび上がらせた。

丹野郁著の前掲書において引用されている中山千代の「南蛮服飾の伝搬形態」では、京都と長崎における伝搬を比較し、京都では上層武家階級から庶民へと拡大して行く垂直形態であるのに対して、長崎ではポルトガル人およびキリシタンの周辺から外延的に広がる水平形態であった<sup>\*20</sup>と指摘している。

南蛮服飾は、長崎など南蛮人や宣教師と直接交流がある地域では、大村純忠の息子たちの例からしても、キリシタンを通じて信仰と西欧文化が同義的に受容されたと解釈できる。しかし、すでに述べたように大村純忠が洗礼を受けてから14年後に大村領はキリシタンの国になったように、やはり権力者の行動に領内の人々は信仰も風俗も従わざるを得ないという構造があり、中山の指摘するような水平形態だったとは言い切れない。

畿内では、ヴァリニャーノの宣教戦略により企画された天正遣欧使節の行列に代表されるように、西欧服飾の顕示は西欧文化の優索性あるいは優越性を強調する機能を託され、カトリックのプロパガンダが目的とされていた。しかし、織田信長や豊臣秀吉およびその他の諸侯など時の権力者は、彼らのカトリックへの宗教的関心の有無とは別に、南蛮服飾を好み、流行へと導いた。しかし、鎖国および禁教後、江戸時代を通じて西欧服飾が連続と受容され続けたことは、ヴァリニャーノの意図には皮肉な結果となった。

日本での洋風服飾の製作に関して、本論で指摘して来たように、1577年のアマドール・ダ・コスタ修道士の通信では大村からシナに南蛮服飾の製作が注文されていた。それが、1590年代の通信にしばしば伝えられていることから、長崎の職人を中心に日本で洋風服飾が製作されていることがわかる。南蛮服飾の

畿内を中心とする流行は、1591年の天正遣欧使節の行列がその契機と大きく関わっていたに違いない。

**謝辞：**上記論文作成に当たり、丹野郁博士にご指導を頂きました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

本研究は山口県立大学付属地域共同研究センターにおいて、サビエルプロジェクトチームによって、「サビエルと大内文化の学際的研究－21世紀に向けた山口文化再創生のための基礎的研究」の一貫で行ったものである。

なお、本論は2001年8月3日にパリのコンコルド・ラ・ファイエットにおいて開催された第19回国際服飾会議において口頭発表したものに、加筆訂正を行った。

#### 注

- \* 1 丹野郁『南蛮服飾の研究－西洋衣服の日本衣服文化に与えた影響－』雄山閣、1993年。
- \* 2 松田毅一「大航海時代と日本」、『総合講座・日本の社会文化史・4』講談社、1973年、96頁。
- \* 3 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 全4巻』平凡社、1994年。
- \* 4 ヴァリニャーノ 松田毅一訳『日本巡察記』平凡社、1978年。
- \* 5 ルイス・フロイス 松田毅一・川崎桃太共訳『完訳フロイス日本史 全12巻』中央公論新社、2000年。
- \* 6 松田毅一監訳『16・7世紀イエズス会日本報告集 全15巻』同朋社、1987～1998年。
- \* 7 『新異国叢書』の中で、本論は主に『イエズス会士日本通信上・下』、と『デ・サンデ天正遣欧使節記』を使用した。
- \* 8 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信

上・下』雄松堂、1996～1998年。

- \* 9 泉井久之助・長澤信壽・三谷昇二・角南一郎共訳『デ・サンデ天正遣欧使節記』雄松堂、1969年。
- \* 10 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 3』平凡社、1994年、181頁。
- \* 11 松田毅一監訳『十六・十七世紀 イエズス会日本報告集 第Ⅲ期第5巻』同朋舎出版、1992年、3頁。
- \* 12 松田毅一監訳 先掲書、3～4頁。
- \* 13 松田毅一監訳 先掲書、291頁。
- \* 14 松田毅一監訳 先掲書、23頁。
- \* 15 ルイス・フロイス 松田毅一・川崎桃太共訳『完訳フロイス日本史5 豊臣秀吉編Ⅱ』中央公論新社、2000年、94～95頁。
- \* 16 ルイス・フロイス 松田毅一・川崎桃太共訳『完訳フロイス日本史3 織田信長編Ⅲ』中央公論新社、2000年、278頁。
- \* 17 松田毅一「キリシタン学校」『大航海時代の日本 6 受容と屈折』小学館、1979年、45～46頁。
- \* 18 ルイス・フロイス 先掲書、320頁。
- \* 19 松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集 第1期第2巻』同朋舎、1987年、164頁。
- \* 20 丹野郁 前掲書、55頁。

#### 図版出典一覧

- ・相賀徹夫編著『大航海時代の日本 2 布教と貿易』小学館、1978年。  
図版1－20頁 図版3－5頁 図版9－122頁 図版11－86～87頁
- ・丹野郁『南蛮服飾の研究』雄山閣出版、1993年。  
図版4－13頁 図版5－30頁
- ・『来日450周年 大ザビエル展図録』東武美術館／朝日新聞社、1999年。  
図版2 図版6－175頁 図版7－121頁  
図版8－73頁 図版10－74頁 図版12－127頁